
ティターニアの贈り物

福路朋子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティーターニアの贈り物

【Nコード】

N7278K

【作者名】

福路朋子

【あらすじ】

皆さん、初めまして。初寺一です。一応主人公です。

この話は妖精の王様と女王様の痴話喧嘩に巻き込まれるごく一般的なな！！！！（ここ重要ですよ！！）高校生のお話です。

あと、あんまりファンタジーじゃないです。魔法と剣の世界とかじやありません。

実在の人物、団体とはまったく関係ありません。もろフィクションです。そうでなければおもに自分が泣きます。つか、泣いています。厳密に言えば泣かされています。

つまり。汗と青春と涙の感動ストーリーです。ごめんなさい、嘘です。

あと、何故か妖精に初恋しちゃいました。面と向かっていないのでここで言う!!!好きだ!!!

・・・って、ターニヤ君!?いつからそこにいい!!!?

8/4 15話、あんまり短かったので付け足しました。

とりあえず、初寺家設定とハタ迷惑な妖精女王の設定。(前書き)

ぶっちゃけ読まなくてもおっけーです。

とりあえず、初寺家設定と八丈迷惑な妖精女王の設定。

初寺家の人々。

ういでらいち
初寺一

ごく一般的な女子高生。・・・だと思ってるだけで、普通の人から見るとちよつと変。

何故か、同性にモテる。(ただし本人は一個もうれしくない。)

何故か、妖精に憑かれる。(ただし本人は望んでいない。)

何故か、母が最強。(逆らえない。)

ういでらいほ
初寺母

ごく一般的ではない母。

夫を失ってから何故か専業主婦を続けている。

以前イチが収入源を聞いたところ、「愛w (にっこり)」と、答えたが、百パーセント嘘。

でも怖くてそれ以上聞けなかったヘタレ主人公。(だって怖いじゃん!! byイチ)

テイターニア

ごく一般的な妖精女王。

神話で同じような名前の妖精が出てくるような気がするけど、きっと別人だ。というか、もう別人だ。

初寺母とは古い知り合いで、ただいま初寺家に居候中。

とりあえず、初出家設定とハタ迷惑な妖精女王の設定。(後書き)

主要メンバーのみ紹介。

・・・母が主要メンバーってどうなんだ。

とりあえず、没頭の説明。(前書き)

ジャンルはファンタジーにしていますが、言うほどファンタジーじゃありません。

ただ、妖精さんとかが出てるのでそこら辺はファンタジーです。

ただ、もつと魔法とか剣とか、そういうのを求めている読者にはお勧めしません。

それでもいいというひとは遠慮なく読んでくださいな。

(ちなみに神話に出てくるものも参考にしているので、そこら辺もご了承ください。)

とりあえず、没頭の説明。

「ほぼ初めまして、一さん。不束者ですが今日からあなたにとり憑きます。」

「前後の文微妙に食い違ってるし!!」

それがわたし、初寺一（あ、ういでら いちつて読みます。変な名前でしょう！少なくとも女の子につける名前じゃねーもの!!！自覚は掃いて捨てるほどあるよ!!！）の前途多難な生活の始まりなのでした。

ばさばさ!!

開けた下駄箱から大量の手紙（古風に言うとなぶん恋文、というやつ）が足元に落ちた。

「.....」

「おお、記録更新!.....何したの?」

「わたしが悪いみたいに言わないでよ!」

友人のアン子はけたけたと実に愉快そうに笑った。くそう、他人事だからって.....!

いやね、本来なら諸手を挙げて喜ぶべきなのは分かってんだよ?

ただ.....うちって「女子校」なんだよな、これが。

あ、分かった? 嬉しくない理由。ていうか分かって。あ、いや、もう分からなくていいから代わって! 頼むから!!

わたしは足元に落ちた手紙を束ねて鞆にしまった。

「.....そういう人の良さによわいのかねえ.....」

「え、何?」

「別に。何も言っていない。」

「あ、あ、あ、貴方というヒトはああああ!!!!.....もう、結構です。貴方がソレを直さない、もとい直す気が無いというならば、

「こちらにも考えがあります!！」

『女王様、はやまらないで!』

アン子と別れて帰宅中、そのヒトは現れた。

「（おお、美人。）」

目の前に質素なワンピースに身を包む二十代半ばくらいのプラチナブロンドの髪の外国人さんがいた。

「そこの方。初寺さんですか?」

「え、えと、はい。そう、ですけど?（日本語ぺらぺら!）」

「ほぼ初めまして、一さん。不束者ですが今日からあなたにとり憑きます。」

「前後の文微妙に食い違ってるし!！」
というわけで、没頭に戻る。

『続きは明日の朝刊に』「載りません。」

「うん、あの子十代の子にしかとり憑けないからね。大丈夫、大丈夫。別に人体には悪影響は（多分）ありません。」

「小説だからかつこの部分も筒抜けだよ！ばか！」

「大丈夫、大丈夫、母さんも昔、とり憑かれたけどこのとーりぴんぴんしてるってばよ！」

「母さんと一般ピープルのわたしとでは身体の造りが根本的に違うんだよ！つか、なにそのナ ト口調！腹立つ！」

さてはまたジャンプ立ち読みしてきやがったな・・・！あ、そういえば今日月曜じゃん！やっべ、すっかり忘れてた！

「そう言わずにさあ、あの子も結構大変なのよ。」

「つか、何者ですか、あのヒト。」

「妖精。」

「ほー！どおりで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「びくしー。」

「いや、英語で言えとは言っていないです。それより母さん、今からでも遅くない。精神科か、脳外科に行こう。大丈夫、母さんはたとえどんなになってもわたしの母さんだから。」

「・・・卸すわよ？（にっこり）」

「何を！！？」

笑顔なのが怖い。そして目はまったく笑っていない。

「冗談はさておき。」

「・・・（目はマジだったけどな。）」

「ん？何か言った？」

「いいえ！何も！！！」

「冗談はさておき。」

「・・・。」

つつこんだら終わりだ、色々と。

「あの子の夫が浮気しまくりーのに、家出しまくりーので最悪の甲斐性無しで大変なので、今回は自分がストライキ起こして家を飛び

出して人間界に降りてきたんだけど、人間の知り合いは母さんだけだったので、ここに匿ってもらおうとイチにとり憑いたというわけです。以上、状況説明要約でした。めでたしめでたし！」

「めでたくない!!！」

主にわたしが!!！一番関係ないのに！

『というわけで、よろしくお願いしますね、イチさん。』

「ぎゃあ！」

いつの間にか真後ろにティターニアさんが！（こええ!!！）

「お、おかえりー。」

『おつかいのじゃがいもとにんじんとたまねぎです。』

「ごくろーさん。今日はイチの好きなカレーだってばよ!どうだ、嬉しいか!」

「・・・、うん。」

こんなに嬉しくないカレーははじめてだよ、ばかやろつ。

とりあえず、不安すぎる登校。

朝。

小鳥が大鳥かは知らないけど鳥の囁りが耳に届く。

「おはようございます、イチさん。」

ついでに妖精のモーニングコールも耳に届く素晴らしいあ、さ・・・

そうだ、そういや昨日、わたしは妖精女王のティターニアさんにとり憑かれたんだった。

「おはよう、ございます・・・。」

最悪の朝に乾杯。

昨夜。

テンションの低いままカレーを食べたあと、ティターニアさんからいかに自分の夫の甲斐性無しかを少なくとも小一時間は聞かされ、そのまま勢いに流されて身体を貸すことになっちゃった切ない青春時代。（最後らへんは適当に聞き流してね。もとい、読み流してね。）

まあ、確かにオベロンさんとやらは相当に浮気性であるらしかった。人間界に気まぐれに降りて、（もしくは妖精界から逃げ出して。）そこで出会った女の人を片っ端から口説き落とし、ハーレムを作っているそうだ。（しかもしょっちゅう）そしてその度にティターニアさんが妖精界に連れ帰るそうだ。・・・、うん。大変そう。

・・・わたしも、異性にモテたいなあ・・・。

・・・な、泣いてないもん！これは、あれ、・・・心の汗です！（目を逸らしつつ）

・・・ま、そんなわけで、ティターニアさんも随分我慢に我慢を重ねていたようですが、昨日、ついに堪忍袋の緒が切れちゃったそうですね。（ああ、その場にいらなくてよかったです。）

ともかく、こうやってティターニアさんにとり憑かれているのは、その甲斐性無しの王様、オベロンさんなわけですね。

なので、もし会う機会があったらただじゃおかねえと誓った初寺一、十七歳の初夏（最後らへんは適当に聞き流してくださいね。もと
い（略））

「ティターニアさん、みんなの前では姿現さないでくださいよ。」

『りょーかいだってばよ』

「……………」

母さんの影響がもろに出てしまっていたが、スルー。（昨日からツッコミすぎて疲れた。）

「じゃ、いつてきまーす。」

とりあえず、不安すぎる登校。(後書き)

全然話すすまねー・・・。

ま、気長にいきます。

とりあえず、噂の甲斐性無し華麗に(?)登場!

「あん、おはよ!」

見慣れた後姿に声をかける。

「おお、おはよ!」

中学校からの付き合いの足立あんこ。可愛い名前だと思っけど、
というか、「子」がつく名前が好き。だって、可愛くないか!?素
朴な感じで、ベタ故に最近は少なくなってしまったけども!ああ、
わたしも一子になりたかった!なんかイチゴみたいで可愛いし。
呼んだら怒るので大体は「あん」と呼んでる。(心の中ではアン子)
『ご学友ですか?』

「(ご)がくゆう。。。まあ、そんなものだけども。」

テイターニアさんは今、分かりやすく言うわたしの中の心の中にいる。
誰にも見えないし、触れられないし、聞こえない。

「テイターーーーーーニアアアア!!!!!!」

『落ち着いてください、王!』

「。。。。。」

「。。。。、誰あれ。」

アン子がぼそりとつぶやいた。

二十mほど離れたところに二十代前半くらいの美青年がいた。(隣
には羽が生えた十五cmくらいのちっちゃいひと。。。うん、多
分びくしー。。。あれが、そうなんだろうな。。。オベロ
ンさん。

登校中の他の女の子達はいきなりの美形の登場に歓声をあげている。

「!!!テイターニアの気配がする!」

「(げっ!)」

『。。。っち。もう嗅ぎつけてきやがったか、デクノボーめ!』

。。。テイターニアさん、怖いです。

『イチさん!逃げますよ!!!』

「(え、これから学校なんですけど!!)」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「どこまでもお供します!こんちクシヨウ!!)」

「そこのお嬢さん!!)」

「・・・・・・・・つ、はい!？」

「げげっ!早速ばれた!？」

「お美しい・・・・、どうですか、この後一緒にランチなどは・・・・。

「

『・・・・・・・・・・・・・・・・反省の色、ぜろ。

』

「え・・・・・・・・。」

「お、おとこのひとに、はじめてナンパされたっ!感動!!」

「すいませんけど、この後学校なんで失礼します!」

「アン子が私の手をひいて、校門をくぐる。」

「ああ!せめてお名前だけでも!」

「う、初寺一です!」

と、言った瞬間。

「お前だな!朝から学校前で奇声をあげる男は!悪いが署まで来てもらう。」

「おお!運命の神よ!何故(以下略。あまりにも長いので。)」

「変な人。」

「アン子があきれた様につぶやいた。」

「うむ、まったく同感だよ、べいべ。」

とりあえず、噂の甲斐性無し華麗に(？)(登場！)(後書き)

ちなみに「子」で語ってることは私の意見です。
だってかわいいーじゃん！(爆)

とりあえず、なんか分かり合っちゃう。

下駄箱の惨劇。

数がまた増えちよるよ、おっかさん。(誰)

思わずその場でorzきめちゃったぜ、ばかやろう。

『まあ、イチさんはとても多くの人に好意を寄せられているのね。』

「……………(まあね。)」

「もうレズになればいいじゃん、面倒くさい。」

「何度も言いますが、自分、一般ぴーぶる……………ん？ぴーぽー？……………英語は苦手だ……………ともかく一般人なのでそつちのケはまった

く無いです。あー、共学受ければよかったああ。」

もちろん、後の祭りというやつだ。

くそう、母さんの勧めなんかを真に受けたわたしが馬鹿だったよ。

「……………は！まさか、あんもわたしをそんな目で!？」

「……………………………………………………………………………………………」

(冷たい目)

「……………サーセン……………」

友情は美しい。

『イチさん。』

「へい、なんでっか。」

「は？なに？」

おっと。間違えた。

「や、何でもなし。(ふー、思わず声に出しちゃった。気をつけな

いと。)

『その恋文、同性の方からでは?』

「(あー、うん。せめて異性からなら喜べるんだけど、ね。)

靴を履き替えて、廊下を歩き始める。

『……………』

『……………』

「……………?(ティーターニアさん?)」

『・・・苦勞しているんですね。』

わりとまじな声音で、感動。(わたしの周りのやかからは、このネタのことになると、イジリ倒しが基本だからである。)

「(どうしたの、急に優しいじゃん。)」

『・・・まあ、経験談・・・というか、はい。』

ティターニアさんが遠い目をした。・・・おお、親近感。

とりあえず、なんか分かり合っちゃう。(後書き)

ちなみにテイターニアとか出てますけど、神話とかじつた程度な
で、ちゃんと読んだことは無いです。変なところあっても、生暖かい
目で見てくださいいな。

・・・短くても、許してくださいいな!

とりあえず、頑張ってみよう。

靴箱の惨劇、再び。

「……。」

「……、なんか、可哀相になってきた。」

「あああ！告白なら直接言つて！！」

も、不登校になっちゃうよ？グレちゃうよ？

第一、なんでこんな（主に同性）にモテるんだろっ。

帰宅部だし、交友関係そこまで広くないし（せいぜいクラスメイトとなら挨拶を交わすくらいだ。）、そこまで美人ってわけでもないし。

『あら、最後のは間違っているわ。イチさんは普通に美少女の部類に入りますもの。』

真顔でティーターニアさんが言った。・・・え、ふつーに照れるんですが。

「………よし！」

決意しました。たったいま。

「え、なに？どうしたの。」

「彼氏、つくる！」

まあ、結局は一番の解決方法だね。今さらだけど。

「問題はどうかやって彼氏を作るかなんだけども。」

「つか、一番の問題でしょ。」

その通り。女子校にはリアルに出逢いが無い。………無い。だからこそ、飢えた少女達の恋文なるものがわたしの下駄箱に集まるのだろっ。（まったく迷惑なことだ。誰だ、女子校つくろっつって言ったやつ。）

というか、そもそも精神のところに他人ティーターニアさんがいたら、彼氏作るどころじ

やないよなあ。

「……………！）ティターニアさん）」

『……………はい。』

「（仲直り、協力しても、いいですか。）」

とりあえず、頑張ってみよう。(後書き)

ちなみにイチは超美少女！・・・ではなく、そこそこの美少女です。
というか、ティターニアさんって打つたびにティターニア産って出
てくる・・・。

どっかにそんな国があるのだろうか・・・。

とりあえず、たまには違う人の視点で。(前書き)

王様のお目付け役、ターニャ君の視点。

とりあえず、たまには違う人の視点で。

『テイターニアああ……。……。ぐすつ』
いい加減妖精界に戻りたい。俺は、王にばれないようにため息をついた。

お目付け役（もしくは監視役）としてオベロン王のお供になってしまった自分のクジ運を呪う。（ここぞって時に弱いのだ。どうでもいい時は勝つのに。）

その後、警察官から逃れるため、妖精の姿の戻った（普通のニンゲンには妖精は見えない）王とともに、再びニンゲンの姿に戻り、『ナンパ大作戦 ジャパニーズ大和撫子をGETだぜ！』……。無理やりつき合わされ（付き合わないと滅給するっていいやがった！ありえねえ！）、そして、女の子達と別れ。

……。ただいま、王のテンションだだ下がり。（一定周期でこうなるのがまたウザい。この情緒不安定ヤローめ。）
悪い御方じゃないのはよく分かっている。（女王はもっと分かっているだろう。）

真っ直ぐすぎるといっつか、周りを省みなさ過ぎるといっつか。

多分、未だに王は何故女王に怒られているか分かっていないだろう。（女王もやはり、それには気づいているんだろっつが……。ふむ、複雑な女心ってやつかな？）

本人は浮気してるっていう自覚も無いんだろっつなあ……。だって、もう、本能だもん、ナンパするときの動きは。

「こんにちは。」

『あ、はい。こんにちは……。』

少女が、こちらを見て、言った。

何故だ。フツウのニンゲンに自分達の姿は見えないはず。

『おお！貴女は今朝の運命の女神！！また逢え……………、む？
王も異変に気づいたようだ。』

『……………君は？』

俺が警戒を込めて聞く。少女はその素振りに気づいているのか、気づいていないのか、無邪気に笑った。

「わたしは初寺一。ティターニアさんの宿り主です。」

納得。女王の魔力がこの少女にまで影響してしまっているのだ。

「……………ティターニアさん。」

少女がつぶやくと、彼女の隣にティターニア女王が現れた。

美しいプラチナブロンドの髪。金色の瞳。花を象った装飾品に、薄手のワンピース。

『……………』

『……………っ！ティターニアあああぁあっ！?!?!?』

王が数百m吹っ飛んだ。……………ぐーで。

まさしく、ティターニア我らが妖精女王。

とりあえず、よろやく喧嘩が終わります。

あらすじ

母・時は20XX年、地球は大きな局面を迎えていた。

一・迎えてねえよ。

母・迎えるかもしれない！

一・．．．あ、そう言われたら否定しづらいわぁ．．．ねえよ！
少なくとも今は！これあらすじだからね！？勝手にSF風にしないでよ！

母・でも、ジャンルをファンタジーにしてる癖に一個もそれらしき要素が無いわよ、八話も続けといて。

一・．．．う、それを言われると．．．。てか、それはわたしのせいじゃないじゃん！

母・と、いうわけで今回は母さんと今は亡き父さんの運命の出会いのお話です

一・嘘ですよー、真に受けないでくださいね〜。

綺麗に吹っ飛んで逝った（げぶんげぶん、おっと誤字です。「逝っ

た」じゃないです。(オベロン王は放物線を描いて地面に突き刺さった。(細かい物理現象は気にしちゃ駄目だ。・・・だって怖いもん。)

『・・・・・・・・・・。』

ティターニアさんの額に大きな血管が浮き出していたけど、やっぱり怖いのでスルー。・・・いや！怖いじゃん!?

お付の妖精さんも吹っ飛んでいった自分の王を見て、思わず空を仰いでため息を吐いている。

『・・・・・・・・・・あー！スッキリした』

・・・ティターニアさん、先ほどと打って変わってすばらしい笑顔ですね。

「・・・・・・・・・・、あの、死んでないんですか？中々起き上がったきませんけど。」

『だいじょおぶ！あのひとがこの程度で死ぬなら、わたくし、七百回は殺しちゃってるもの!』

問題発言。

・・・・・・・・・・スルー!!! (ああ、そつさ！俺は命の方が大切だよ！ツッコミは各自でやれよう！) (誰)

ずぼお!!

めり込んでいた頭が抜けて、カワイソウな美青年に大変身した王が再びテイターニアさんに近づいた。(ただし今回はゆっくり。)
テイターニアさんはそれまであげていたテンションの昂りを抑え、真顔になった。

『テイターニア……。』

『……。貴方のことだからまだ、何で怒っているか分かってないんでしょね……。』

「まじすか! 『ごめんなさい、ちょっと黙ってていただける?』。・

・ハイ。」

やべ、今シリアスパートだった? ごめん、KYで。(だってオベロンさんの顔、まだヒドイんだもん。)

『教えてくれ! 自分に悪いところがあつたならできるだけ直すから

!』

『……。本当?』

『ああ! 勿論だ!』

『……。じゃあ、今度女の人を口説いたら……。』

『……。卸しちゃうから。』

(めいど・いん)母や-----
ーん!!!!!!

あのあと、オベロンさんはつい視線を逸らして口ごもってしまったので、再び地面にめり込んでしまったけど、それ以外は大体世界は平和である。・・・嗚呼、生きてるって素晴らしい。

ここはもう、夫婦水入らずにしてあげようと思って、先にさくさく帰ってしまったおつと逃げ出し・・・げふんげふん！・・・もとい、気を遣ったわたしは、昨日の残りのカレー（カレーは一日経ったほうがおいしい）を食べていたのだが。

『わたくし達夫婦共々世間知らずなため、長老達に無期限の人間界の見聞の旅に出るように言われてしまい、しばらくここに住んでもよろしいですか？』

『うむ、よろしく頼む。』

「おっけー」

「・・・まじか、お前ら！・・・！」

私の苦難はまだまだつづ・・・かないでいいからあ！・・・！

とりあえず、よつやく喧嘩が終わります。(後書き)

いまんところは毎日更新してますけど、春休み終わったら不定期になるかもです。

もし見てくれている人がいたらごめんなさい。

このころすっかり尻にひかれてるオベロンさん（人間バージョン）は、掃除機をかけつつ言っていたが、ティターニアさんに卸されてしまった。（そういう時は黙って見なかったふりをすべし！）

うーん、こんな美男美女に家事押し付けちゃっていいのだろうか。

（楽で助かるけど。）

『自分は二人ほど長時間変化はできません。』

「だいじょうぶ！そんな時間かからないし。明日わたしの学校に迎えにきてよ！そこから真っ直ぐ家に帰るだけだしさ。それでだいぶ減ってくれるって思うんだ！」

『・・・うう。』

逃げ場をなくしたターニヤ君はうめいた。

とりあえず、偽装恋人を作ってみる。(後書き)

今回は繋ぎの回なので短いです。

とりあえず、流されてでえとすることになりました。前編

「う、うそよ・・・、わ、私、信じない!!」

信じて、頼むから。

「お、お姉様ああ・・・!!」

いつあなたの姉になったよ？

「ていうか、隣のおとこのひと、格好いいね!!」

「あたしもそうおもった!」

あ、それは同感。妖精さんって美男美女しかいないんだろうか。

「これは、確かに・・・、気が滅入りますね・・・。」

ターニヤ君は好奇の目に耐えつつ、小声で言った。

「すまん。じゃあ、さくさく帰ろう。」

今日のためにアン子には先に帰ってもらった。(超ニヤニヤしてたけど、今回ばかりは有難い。)

「これからデートするんじゃない?でないとわざわざ迎えに来ないでしょ!」

「!!!!!!!!」

わたしたちに戦慄がはしる！ででででででででででででででででえとおお！？！？

「嘘よ！そんなわけないわ！お姉様は私に何も言わずそんなことするはず・・・！」

ていうか、だれだよ、わたしのことお姉様って呼んでるやつ。顔も名前も知らないぞ。

「じゃあ、尾行してみない？このままデートに行ったら恋人ってことで。」

誰だあああ！！さつきから余計なこと言ってるやつううう！！

「・・・。」

アイコンタクトをとる。すみません、ちょっと茶アしばきにいきませんか。と、目で訴えてみる。

「・・・、わかりました。」

ターニヤ君はふかあくため息をついた。(すみません！)

それにしても困ったぞ。

デートなんてしたことない。デートって何すんの？ていうか・・・

デートって・・・なんだろう。(遠い目)

「とりあえず、適当に店入りますか。」

ターニヤ君がそう言ってわたしの手を握った。・・・うおう！？

顔に熱が集まる。やべえ、今胸キュン(死語)した。

「う、う、うん！」

「それ、どっちですか。」

ターニヤ君がへらりと笑った。

「……………あのさ、前から気にはなってたんだけど、なんで敬語かなあ？」

「え……………」

「テイターニアさんはアレがデフォルトだからいいけど、ターニヤ君は言葉作ってるじゃん。せっかくだから、ふつうに話そうよ。」

ターニヤ君はしばらく固まっていたが、突然くつくつと抑えるように笑い始めた。

「え、え？な、何で笑うの？」

「ぶ、くくくつ！貴女は面白い人ですね。」

「……………褒めてる？」

「勿論。」

ターニヤ君は笑っているだろう口元を押さえつつ言った。（……………説得力ねえ）

「それじゃ、いくか。イチ。」

とりあえず、流されてでえとすることになりました。前編（後書き）

今回はラブコメってますね。

べ、別に他の人が投稿した小説見て「自分の書いてる小説には色気が足りないんじゃないかね？」とか、思っただけじゃないもん！

・・・それでは次回もがんばってラブコメるぞー。えいえいおー。

とりあえず、流されてでえとすることになりました。後編

商店街を二人でぶらぶら。

「どこ行く？」

「俺まだきたばっかで分かんないから、案内、とか？」

「そうか、そういえばそうだね……。ていうか、ターニヤ君って自分のこと「俺」っていうんだ。」

「……。変？」

「あ、や、そうじゃなくて。……。新鮮？」

「その間は何だ。」

「他意はないです。信じてください。」

わたしが真顔で言うと、ターニヤ君は屈託無く笑った。

「……。ああ、いいなあ、美形の笑顔。癒されるわ。 (ティターニアさんとオベロンさんも、見た目は超いい。中身がわりと壊滅的だけど。)

「……。女の子たち、まだついてきてる？」

「……。ああ。正直鬱陶しい。妖精に戻ってもいい？」

「駄目です。」

「……。だよなあ。」

ターニヤ君は面倒くさそうに頭を掻いた。

「よおし、じゃーまずはおいしいおやつのお店に行くとしますか！」

「え、でも夕飯が。」

「それとこれとはベツバラなんですぞ！」

「ばかつぽおおー!!」

「これは完璧デートだね。」

二人の女子高生が電信柱の影から二人を伺っている。

沈黙が苦にならない。それだけ、ターニヤ君と仲良くなれた気がする。

「帰るか。」

「うん。」

「……………なあ、」

「ん？」

「……………手、繋いでいい？」

「……………。」

初寺一、妖精に恋しました。（しかも初恋。）

……………ぎゅぎゅぎゅ。

とりあえず、青春だなあ！と叫びたくなる。・・・主に作者が。（前書き）

なんか甘酸っぱい。（当社比）

なんか青春してる。（当社比）

なんかラブコメってる。（当社比）

なんか背中が痒い。（当社比）

なんか照れる。（当社比）

・・・ティターニアさんの設定が荒い。（一般比）

そんな感じのお話です。（最後のは関係ないです）

てめえのかいたラブコメなんか見たくねえよ！と思った方は素直に別の小説のラブコメをどうぞ。

とりあえず、青春だなあ！と叫びたくなる。・・・主に作者が。

「昨日一緒に帰ってた美男子は誰だああああ！！！！」

「紹介して！！・・・その人のお友達を！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・裏切り者おお
おお・・・・・・・・」

「今だから言える！あなたのことが好き！」

あーもー、帰らせてえ・・・。

せつかく手紙の数減らそうと思ってたのに逆に増えた今日この頃。
・・・内容は恐ろしく変わっていたが。
ぐう・・・。なにゆえ神はこんなにもわたしを弄ぶのか！！・・・
とか、言ってみる。

「で、実際のところ、どういう関係なんですかい？」

「・・・あんちゃん、あんたまでそっちにいくか。」

「ノリで」

あーもー、ほんとに愉快だね！我が二年F組は！！

「で、本当にどーなんだあ？このこのお！」
偽装恋人です。

・・・とは言えない。当たり前だけど。

……恋人です。

……、だめ！言えねえ！！恥ずかしい！！！！

いやね、それを言うための昨日のアレ（デート）だったわけなんですけどね、ここで大きな誤算だよ、こんちくしょう。

……ま、マジで好きになってしまったという。そういう少女漫画な展開に！！あり得ない！！！！

……初恋が人外ってどうなんだろう……。 （いや、初恋じゃなくてもだけどさ。）

「なにそんなに考え込んでんの？」

「え！！……えつとあの人は……。こ、こ、こ。」

「いえ！言うのだ！イチよ！誤変換で「位置」って出てきて十三話もやってんの主人公の名前すら誤変換かよwとかって思うな！言うんだ、イチ！！」

「……、コスタリカライスの職人さんで、コスタリカマスターの母さんの下で修行をしている、コスタリカ（ゆうしゃ）見習いなんだ！！」

「……コスタリカライスは勇者じゃないから」

「……よく分かったね。」

「……でしかその事実は分からないはずだ。」

「ちなみにわたしはコスタリカライスなんて食べたことも無けりゃ、見たこともないです。」

「……で？」

「おふざけはここまでだ。とでも言うつようにアン子の目が鋭く光る。」

（怖いよ、まいふれんど）

「……………す、すきなひと?」

「今日はきてないの、『すきなひと』。」

「だ　ま　れ」

「いやん、かおが赤くなつてかーわいー。」

「…………ぬぐう。」

アンこはうめいたわたしをけたけたと笑った。

あのあとさんざんこのネタでクラス連中にからかわれ続け、正直こころがずたずたになっておりまする。

……穴があつたら入りたい。……そのまま冬眠につきたい。
今は初夏ですが。）

校門を二人一緒にまたいだ。

「イチ。」

ターニヤ君がいた。

「、わあ!?!」

「な、なんだよ、びっくりした。」

「なな、なんでいるの?」

「え、あれって毎日じゃ……………分かった、帰る。」

「あ、いやいや!い、嫌とかそういうわけではなくてですね!」
帰ろうとしたターニヤ君の腕を思わず掴む。

「い、一緒に帰りましょう。(どうせ家同じだし。)」

「あら、あたし、お邪魔?」

アン子が嫌らしく笑う。(こんのお……………!)

「まあ、今日はどうせお花の日だし。それじゃ、失礼するわね。」

「…………むむ…………うん。」

ちなみにアン子ん家は家柄が良く、アン子は生け花に、書道、お茶に、乗馬、等等^{エヘトトラ}がでる超人である。(中学以来見てないが、こぶしの殴り合い(ケンカ)も相当強かった。)

「……むう。」
いつからあんなに物分りがよくなったんだろう……。いつもなら素直に帰らずにチョツカイ出してくると思うんだけど。(余裕で習い事もすっぱかすと思うんだけど。)……ま、いつか。

「じゃ、帰りますか、ターニヤ君。」

「なあ、イチ。」

「なんですか、ターニヤ君。」

「なんか、怒ってる?」

「……少なくともターニヤ君にはないので、心配しなくてもいいです……。」

主にうちのクラスのせいです。

「なんで敬語?」

「おっと、あれ、わたし、敬語になつてた?ごめん。……うーん、ティターニアさんのがうつったのかなあ。」

「まあ、一応とり憑かれてるしなあ。」

「そういえば。」

最近すっかり忘れてた。……そうかあ。

「ん?ターニヤ君とオベロンさんって誰にとり憑いてるの?」

「あんたの母さん。」

「ま、まじか!すげえ!」

二人も自分の精神にとりこむなんて、並みの精神構造じゃ無理だ。わたしなんてティターニアさんでいっぱいいいっぱいなのに。

「ところで、明日からは迎えに行かなくてもいいよな?」

「え。……うん。」

た、確かにそうだよな、毎日来てもらうなんて……。

「え、何？俺が来ないとさびしい？」

ターニヤ君がからかうように笑ったので、少し力チンときた。反撃してやるう。

「うん、さびしい。」

ターニヤ君が黙った。心なしか、顔が赤くなった……ような気がした。……けど、顔をそらされてしまった。

「……。」

「……。」

う、自惚れても、いいんだろうか。

数歩先を歩くターニヤ君に遅れないように歩きながら、わたしは思った。

とりあえず、青春だなあ！と叫びたくなる。・・・主に作者が。（後書き）

あーもー次回からはいつものコメディ戻るぞこんにやる。
ラブコメ書いてるとなんか背中が痒くなる。

誤字脱字がないか一話から見直してたところ、人物描写がティターニアさん以外あんまりしていないことに気づきました。
昔はしつこいくらいしてたんですけどね。

ということであとがきでしてみる。（いまさら本編ではできないので）

イチと母は黒髪黒目のふつうの一般人です。（イチはセミロングくらいで、母は肩と腰の中間くらいのをひとつに束ねてます）

オベロンさんは銀髪に碧の目です。（髪の色は肩につくくらいです。）

ターニャ君は髪も目も琥珀色です。（髪の色は短めです。）

柏木あんこの独り言（前書き）

イチの親友であり、理解者であり、そして最大の敵^{ラスボス}（？）であるア
ンちゃんの独り言とか、企み事。

柏木あんこの独り言

おはよう。こんにちは。こんばんは。おやすみなさい。おとといきやがれ、くそつたれ。

いつ読んでても問題の無いように、朝昼晩に深夜の挨拶に、極道の挨拶まで完備してお迎えです。
初めまして、柏木です。

柏木和菓子店とかいうところの一人娘です。
今年で百周年を迎えたらしく、セールかなんかで、店の中がいつも以上に混んでるから正直、鬱陶しいことこの上ない。

『革新と伝統』をキャッチコピーに全国チェーンにまで一気に上り詰めたのは、あたしが小学生の時だった気がする。

と、まあ、内輪事情はさておいて。

あたしには中学のときからの友人がいる。
名前は初寺一。ういでらいち、って読む。

なんとそいつに「すきなひと」とやらができたのだ。
中学時代からそんなモノとまったく無縁だったあいつに、ついに春が……！！

……まあ、本人が気づいてなかっただけで、地味にモテたけどね。あの子、ふつーに可愛いし。性格もさばさばしてて、人当たりもいいし。

……そっぴや、時に露骨に好意示されてても、持ち前の鈍感さでスルーしてたっけかなあ。……ぶっ！！（思い出し笑い）
玉砕した男子をからかうのがまた、たのしーわけで。

じじい（祖父・九十五歳、あほみたいに元気）に言われて渋々通っている華道教室への道から、商店街の道に進路変更しようか迷って（サボりですけど、何か？）、一度後ろを振り返った。

イチと、「すきなひと」とやらの、帰っている後姿が見えた。

二人はまだ歩き始めたばかりのようで、変な初々しさで歩いている。その距離感は友達にしては近すぎて、だからといって恋人同士にしてはちょっと遠すぎる。

「（はっはーん。）」

何かあるな。

アタシはそう直感して、にやりと笑った。

「（明日、問い詰めてやるっつと。）」

あの子は嘘をつくのが下手だ。

少し揺さぶってやれば、すぐ白状するだろう。

楽しくなってきた。

気がついたら鼻歌を歌っている自分がいて、そういやこのところ、楽しいことなかったっけ。

そう思って、また笑った。

柏木あんこの独り言（後書き）

初めて題名に「とりあえず」がついてません。

単純に本編と区別する為だったりします。（あんちゃんは何んでもソツなくこなす以外は一般じゃーん、の設定なので。）

つうか、いつの間にかポイント入れてくれた方がいるのを発見。

こういうのしてくれると、やる気出ますね。ありがとございます。

ストックがたまってるくせに、時間が無くて中々更新できなくて、

ごめんね

とりあえず、超暴風警報。(前書き)

わりと初期に設定は上がってたけど、うっかり忘れていたイチの
ーが満を持して登場。

とりあえず、超暴風警報。

家に帰ると、懐かしすぎるぼろぼろのナイキのシューズを玄関で発見した。

・・・うん、逃げよう。

わたしは思わず帰ったばかりの家から、脱ぎかけたローファーを履きなおして、一緒に帰ってきたターニヤ君を押しつけてまで外に出ようと思いました、そう、なぜなら、その靴は。

ジャアアアア・・・!

水洗トイレの流れる音がした。

早く逃げればいいものを、わたしは、ぎ、ぎ、と、そちらを振り返ってしまった。

「あー！便秘ぎみだわー。母さん、ヤク トある？」

トイレから出てきたのは、ぼさぼさの髪、タレ気味のやる気がなさそうな目、丈が足りていない中学校の頃の小豆色のだっさいジャージに身を包む、

「お、イチ。たでーまー。ん？おかえり？・・・ま、いいか。あれ、つか、隣のやつも妖精？」

「自分探しの旅」という、いまどき時代遅れ過ぎる、尾 豊もびつくりの旅に出たはずの、七年ぶりの兄貴の姿だった。

昔から兄が苦手だった。

その最たる原因は多分、というか、絶対、兄の夢見がちな現実離れた思考に違いない。

プチ家出の回数は30を軽く超え（大体お腹が空いたら帰ってくる）、腹が立つくらい、飄々としている。死ねばいいのに。・・・おっと、今のはオフレコでお願いします。

「で、何で帰ってきたの？」

兄の好物が並ぶ夕飯の席で、わたしは隠しきれない苛立ちを滲ませながらエビフライを口に入れる。

他の居候三匹はその空気を感知取って、いつもと違い、実に静かにお行儀良くご飯を食べている。

「たまたま近く寄ったから。」

兄貴はエビフライの尻尾まで噛み砕いて、次のおかずを手を伸ばした。

「あんた等、相変わらず仲悪いわねえ。」

母さんはけたけたと実に愉快気に笑う。

「イチが俺を嫌ってるだけだよ。」

「まったくその通り。分かかってんならはやけどつかいけ。」

「あ、それなだけどさ。」

実に、衝撃的な。

まさに暴風警報のような一言を、馬鹿兄貴が囁いた。

「旅費が底ついちゃってさ。俺、しばらくここでバイトするわ。」

とりあえず、超暴風警報。(後書き)

おひさしぶりです。

大幅付けたし。しました。

兄の旅の理由は次でやります。多分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7278k/>

ティターニアの贈り物

2010年10月20日12時31分発行